

## 「鈴振り」の舞台と関東十八檀林

五代目古今亭志ん生の落語「鈴振り」の舞台となっているのは藤沢市の遊行寺。

東海道本線の藤沢駅から旧東海道を江戸方面に少々戻った「藤沢宿」の奥にある遊行寺は、一遍上人が興した時宗の総本山。

江戸から歩いてくる人の視線で表現するなら、保土ヶ谷あたりから続く山中の道を進むと台地の南端に達して長い下り坂（遊行寺坂）が始まる。坂の下には藤沢の宿場が見えて、その先には海岸線と海の煌めきも望むことができる。さあ、この長い下り坂を下りきれば……。

下り坂の終点の右手の山肌に貼り付くように建つのが遊行寺である。正式名称は「藤澤山無量光院清浄光寺（とうたくさんむりょうこういんしょうじょうこうじ）」と言う。1325年（正中2年）に遊行四代の呑海上人が開山したとされている。

（右画像：正面の惣門というは坂 下画像：本堂 2020年2月撮影）



広い境内の西側の奥に僧堂や書院などが並ぶ一隅が有り、このあたりで若い僧の修行が行われていたようで、「鈴振り」で語られている情景を思い浮かべながらの境内を散策すると面白い。

この落語の原話は松浦静山の「甲子夜話」、あらすじを語ってしまうと興味半減どころか興味全減になってしまうし、文字で書いたものを読むのでは落語の持つ面白さにはならないので、触れぬことにしておく。



志ん生は本題の「鈴振り」に入る前に、枕でいくつかの小咄をつなげて客席を温める。どこにでもありそうな身近な滑稽話で始まり、小野小町が登場したかと思えば左甚五郎も出てくる。

小咄のひとつが「十八檀林」。十八檀林とは、浄土宗の僧侶養成のための学問所で、徳川家康が定めたもの。「関東十八檀林」と言われる十八の寺を巡って修行を重ねることで、衣の色や枚数が変わり僧侶としての地位が上がっていく。

小咄では、十八の寺の名前を並べて行くのだが……。一見重厚そうな話題で、初見の客は思わず引き込まれて行く。そして、最後の「芝の増上寺」に達した後に「下げ」になる。引きずり込まれた客席は、「下げ」の馬鹿馬鹿しさに笑うことよりも、ここまで引きずり込まれてしまった自分の馬鹿馬鹿しさにも笑ってしまう。

私が持っているCDでは、志ん生は「下げ」までやっていた。飽くまでも「鈴振り」を全うするための仕込みに拘ったのかもしれない。志ん生の語りを脳裡に映しながら十八の寺を巡る旅を試みる。

### 1. 下谷の幡随院（ばんずいいん）

1603年（慶長8年）徳川家康が江戸に幕府を開くにあたって知恩寺33世住持の幡随意上人を呼び寄せて、神田駿河台に創建。正式名称は神田山新知恩寺幡随院。1617年（元和3年）神田川開削工事に伴い下谷池之端に移転。1657年明暦の大火で焼失し、1659年（万治2年）浅草吉町に再建。1682年（天和2年）の大火で類焼ののち、1698年（元禄11年）の大火で再び焼失。1701年（元禄14年）に徳川綱吉の母の肩入れにより再建したが、1792年（明和9年）の目黒行人坂大火で類焼したが再建復興。この他にも度重なる火災の影響で少しずつ衰退を余儀なくされた。

この寺の不幸はまだ続く。1923年（大正12年）の関東大震災で堂宇を焼失、再建後1937年（昭和12年）自火焼失し、1940年（昭和15年）武蔵小金井に移転して現在に至る。

「江戸の歴史は大火の歴史」と言う人が多いが、まさに焼失と再建の繰り返しをしてきたという不思議な寺ではあるが、これも幕府の後ろ盾があつたのだったと思う。

この寺が下谷にあったのは1617年から1657年までの間だけなのに「下谷の幡随院」と語り継がれるのは檀林としての位置づけのせいもあったのだろう。

現在の幡随院は、武蔵小金井駅南口から徒歩僅かの所にある。

2. 鴻巣の勝願寺(しょうがんじ)

高崎線の鴻巣駅から徒歩 10 分足らずの線路際に建っている。天照山良忠院勝願寺が正式名称。

下谷池之端からの距離は、現在の道路事情で測ると 50Km 弱。

浄土宗の第三祖良忠上人が鎌倉幕府の執権北条経時に土地の寄進を受けたことから、1252 年(建長 4 年)に鴻巣市の登戸に創建したのが始まりと言われている。永享年間(1400 年代)に相続者が不在となり浄土宗の寺としての歴史は途絶え、室町時代・戦国時代の戦乱でさらに荒廃し、真言宗の寺となった。のちに天正年間(1570 年代)に現在の地に移され、徳川家の強い庇護を受け、浄土宗の寺として再興し、檀林としての機能を持つ寺の先駆的存在。

3. 川越の蓮馨寺(れんけいじ)

1549 年(天文 18 年)川越城(河越城)城主大道寺政繁の母(蓮馨大姉)によって開基。甥である感誉上人を第一世として開山。孤峰山宝池院蓮馨寺が正式名称で、本川越駅(西武線)及び川越市駅(東上線)の北方にある。蓮馨寺という名も美しいが、寺がある町の名「川越市連雀」も美しい。

鴻巣の勝願寺からは、荒川・入間川を渡って 18Km の道のり。

4. 岩槻の浄国寺(じょうこくじ)

再び入間川と荒川を渡って東へ 21Km、岩槻浄国寺の正式名称は仏眼山英隆院浄国寺。

東北自動車道岩槻ICの近くにあり、東武線の岩槻駅から徒歩圏内。岩槻城主太田氏房の開基により、鴻巣勝願寺の清巖上人の隠居寺として 1587 年(天正 15 年)に創建された。太田氏亡き後も岩槻城主の墓所として使われた。

5. 下総小金の東漸寺(とうぜんじ)

常磐線北小金駅から南西へ徒歩 10 分足らずの所にある仏法山東漸寺。1481 年(文明 13 年)の創設時には松戸の根本内にあったが、敷地が狭いことと建物の傷みが進んできたことから、天文年間に小金城城主高城氏の勧めで現在の地に移った。新しくなった東漸寺は、広い敷地に設備を整え、のちに檀林となった。岩槻の浄国寺からは、越谷を抜けて中川・江戸川を渡り流山を抜けて、28Km の行程。

6. 生実の大巖寺(だいがんじ)

東漸寺から 40Km を歩き、千葉生実(おゆみ)村の大巖寺へ。蘇我駅を出た外房線が京葉道路を潜り抜けると、左手に淑徳大学千葉キャンパスが見える。大巖寺はキャンパスの東側にある、と言うよりも、寺がある山の西側に大学が移ってきたという表現が正しいかもしれない。

正式名称は龍澤山玄忠院大巖寺、天文年間(1500 年代)に生実城主原胤栄の開基により創建。

南面に切れ込む大沢は龍が沢と言われていたことから山号になった。関東の寺の中では一番早い時期から徳川家康との深いつながりを持ち、生実城滅亡の後は幕府の祈願寺となった。

7. 八王子滝山の大善寺(だいぜんじ)

観池山往生院大善寺は中央自動車道八王子 IC の南隣にある。千葉の生実から八王子まで 85Km、移動距離が長くなってきた。1500 年代後半(天正年間)に北条氏照の開基により滝山城下(現在地の北東、多摩川南岸)に創建されたが後に八王子城下に移転。(八王子城は圏央道八王子 JCT の八王子城跡トンネルの上)八王子城落城に伴い再度の移転を経て江戸時代には檀林となったが、戦後浄土宗から独立して単立となった。1981 年に現在の地に本堂が再建され、2018 年には再び浄土宗に復帰したという変わり種。隣接地で富士見大霊園を経営しており、松本清張・赤塚不二夫などの墓があるらしい。

8. 常陸江戸崎の大念寺(だいねんじ)

茨城県稲敷市江戸崎にある大念寺は、霞ヶ浦の南側、流れ込む小野川の畔にある。正定山智光院大念寺が正式名称で、1590 年(天正 18 年)慶巖上人が開山。本堂の阿弥陀如来像は 1200 年頃(鎌倉時代後期)の作で、快慶を感じさせるものと言われている。1600 年(慶長 5 年)に火災で焼失したが、二年後には再建された。大善寺から 108Km、修行とは言え、一日で移動したのだろうか。

9. 上州館林の善導寺(ぜんどうじ)

善導寺は、館林駅の東部(現在の本町谷越商店街のあたり)にあった。708 年(和銅元年)行基により開

山という古い歴史を持つ寺だが、1590年(天正18年)に館林城主になった徳川四天王のひとり榊原康政が菩提寺として諸設備を整えた。1990年(平成2年)に館林駅前再開発に伴い現在の城沼の東端の岸边に移転した。江戸崎の大念寺からは85Kmの旅。

#### 10. 本所の靈山寺(れいざんじ)

錦糸町駅の北北西、現在の地名では横川1丁目。この辺りはお寺さんが多いところだ。

1601年(慶長6年)大超上人が神田駿河台に建立。二世の時に神田川対岸の湯島に移転したが、明暦の大火の後浅草に移転。三世で檀林を断絶したが四世で復帰し、1689年(元禄2年)現在の地に再移転。正式名称は常在山二尊教院靈山寺、現在の所在地で測ると善導寺から74Kmになる。

#### 11. 結城の弘経寺(ぐぎょうじ)

館林から本所へ行き、本所から結城へ行くとは随分意地悪な旅路ではないか。寿亀山松寿院弘経寺は、水戸線結城駅から北へ20分ほど歩いたところがあり、本所靈山寺から真北へ75Km。

1414年(応永21年)良肇上人により寿亀山天樹院弘経寺が水海道に創建された。1577年(天正5年)下妻城主多賀谷氏と小田原北条氏の戦いに巻き込まれてしまった。多賀谷氏はこの寺に陣を張って戦い、結果として堂宇は焼失してしまった。結城家18代秀康が、存把上人を招いて結城に寿亀山松寿院弘経寺として再建した。その結果、関東十八檀林に弘経寺と言う名が二つ存在することになったようだ。

#### 12. 下総飯沼の弘経寺(ぐぎょうじ)

前述の水海道の寿亀山天樹院弘経寺を、結城と区別する意味で「飯沼弘経寺」と呼んだ。戦火に痛めつけられたこの寺は、江戸時代初期に了学上人によって再興された。徳川家康の孫(千姫のちの名を天樹院)が深く帰依し、自らの菩提所と決めてその後の再建にも深く関与したことから、寺の名に「天樹院」が使われることになった。結城の弘経寺から鬼怒川に並走して34Km、関東鉄道中妻駅から鬼怒川を渡って西へ進んだ所があり、この辺りには昔は飯沼という沼があった。現在の国土地理院の地形図を見ると寺の南側に飯沼という表記があるが、地名としての「飯沼」はもう存在しないらしい。

#### 13. 深川の靈巖寺(れいがんじ)

1624年(寛永元年)靈巖上人の手により開山、日本橋の芦原を埋め立てた島(のちに靈巖島と名付く)に建てられ、檀林も設置されたが、明暦の大火で延焼。1658年(万治元年)幕府の火事対策を意識した都市計画により現在の地(江東区白河)に移転した。清澄白河の深川江戸資料館には何度も通ったが、館の裏手(北隣)にある寺だとは知らなかった。今では靈巖島という地名も残っておらず、新川一丁目に靈岸島という交差点が残っているだけになってしまった。

道本山東海院靈巖寺が正式名称で、飯沼弘経寺からいずれの靈巖寺まででも54~55Kmはある。

#### 14. 上州新田の大光院(だいこういん)

群馬県太田市のシンボリック的存在である金山(海拔236m)を背にして立つのが義重山大光院新田寺。仕事で北関東方面に出かけた時に何回か立ち寄ったことがある。地元の人は大光院または呑龍さんと呼んでいた。1613年(慶長18年)徳川家康が先祖である新田義重を祀るために、呑龍上人を招聘して創建した。上人は捨て子や間引きが行われていた時代に、犠牲となった子らを寺に集めて弟子という名目で育てたことから、「子育て呑龍」と言って長く崇められ、これまた太田市のシンボリック的存在になっている。新川の靈岸島交差点を起点として、大光院までの道のりは89Km。

#### 15. 常陸瓜連の常福寺(じょうふくじ)

茨城県の山に出かけ始めた頃に車で走っていて見つけた「瓜連(うりづら)」という地名。どこか響きの良い名前前でその由来が気になった。調べてみたら「潤い(うるい)が連なる、つまり湿地が連なる」という説と「アイヌ語で丘を意味するウリに、大和言葉のツラナルが合体した」という説があった。平安時代・鎌倉時代にはこの地名が存在していたらしい。湿地と丘では極端に異なりすぎるので正解は不明な様子。久慈川の岸边に広がる広い農地は海拔10~15m程度、その上に海拔40~50mの集落が広がり、その上に海拔100m足らずの山が続く。

草地山蓮華院常福寺は海拔40mの集落と農地の境界に建っている。集落も寺も暴れる久慈川の流れを避けて、やや高いところにできたに違いない。1300年代(南北朝時代)に了実上人が開山、佐竹氏の庇

護のもとにあったが、1602年(慶長7年)佐竹氏の秋田移封後は徳川家康・水戸徳川家と関係を深めた。新田大光院からここまでは、関東平野を抜けて常陸の山を越えて114Kmの旅。

#### 16. 小石川の傳通院(でんづういん)

瓜連から130Km、小石川の傳通院までは距離的には最大の難関ではなかろうか。牛込に住んでいた頃に、大塚の友人の家へ自転車で遊びに行く時にしばしば通った。大曲の交差点から、文字通り大きくカーブしながら小石川の台地が上がって行き傳通院の前に出る。自転車の難所だったが、都電も一汗かくような動き方だった。無量山傳通院寿経寺というしっかりした名前があるのに、「伝通院」とぶっきらぼうに呼び捨てにしていた。1415年(応永22年)了誉上人が小石川極楽水(現在の東大植物園前から播磨坂方面に入ったあたり)の小さな草庵で開山。後に徳川家康の母が伏見城にて75才で逝去し、この寺を菩提寺としたことで法名(傳通院殿蓉誉光岳智香大禅定尼)から戴き「傳通院」となり現在の地に移された。

#### 17. 鎌倉の光明寺(こうみょうじ)

天照山蓮華院光明寺は浄土宗の大本山。材木座海岸の東端、逗子市との市境の海拔50mの高台にあるので、海を見下ろす絶景の場所にある。1243年(寛元元年)鎌倉幕府の執権北条経時の帰依を受けて良忠上人が開いた。江戸時代になると徳川家康が、関東十八檀林の筆頭に揚げた。

伝通院からの距離は約57Km、高校時代に牛込から自転車で鎌倉まで海水浴に行った時の実感としての距離感を思い出す。

#### 18. 芝の大本山増上寺(ぞうじょうじ)

そして鎌倉光明寺から49Kmでゴールの増上寺に到着。下谷の幡随院を出てから合計1,112Km。

港区で高校時代を過ごしたし勤め人になってからも近隣の町を動いたので行く機会は少なくなかった。何気なく「増上寺」と言い続けてきたので、親しみがある反面きちんとした名前を知らずに過ごしてきた。三縁山広度院増上寺(さんえんざんこうどいんぞうじょうじ)。

9世紀に空海の弟子宗叡が麴町の紀尾井町に真言宗の光明寺を創ったのが始まりで、1393年(明德4年)に聖聡が浄土宗に改宗し増上寺と名を改めたので、開祖は聖聡とするのが正しい。

1598年(慶長3年)に家康によって現在の地に移された。江戸城の鬼門を守るのが上野寛永寺、裏鬼門を守る寺としてこの地が選ばれた。

南側はプリンスホテルになり、西側には東京タワーが建ち、付近の景観は大きく変わってしまった。古地図を片手に芝の浜から浜松町駅を通過して増上寺を目指して歩いたことがあるが、昔が見えて面白い。貿易センタービルは大久保加賀守屋敷、大門交差点を渡ると南北に広がる碁盤の目のような町は中門前町・片門前町・神明町などが並び、その先の芝パークホテル・港区役所・メルパルク等が並ぶ所には学寮や末寺が並んでいた。そしてその先に増上寺が構えている。

増上寺の裏へ抜けると東京タワーでその先は飯倉一丁目、南へ抜けると赤羽橋。今や飯倉という町の名は麻布台に変わり、多くの路線が交差する都電の要衝だった赤羽橋も首都高速道路に覆い被さられて哀れな町になってしまった。

歴史は消え去るものとは言いながら、残すべき史実・名前や由来など語り継ぐべき話は多々ある。十八の檀林を辿りながら、そんなことを感じた。まだ行ったことがない寺の方が多いので、何回かに分けて順番に訪ね歩くのも面白いかもしれない。

以上